



写真 アフロ

第 2 回

「ラスコー洞窟の壁画」

前1500年頃 フランス

ラスコー訪問記

フランス南部、満々と水を湛えて緩やかな流れを形成するドルドーニュ川の流域に、レゼジーという小さな村がある。パリから列車を乗り継いでおよそ5時間、かの有名なラスコーの壁画にも近い有名な地域なので、もっと大きな街なのかと思っていたが、着いたのは無人の駅舎だった。村は歩いてまわれるほどの広さしかなく、どこにでもあるような南仏の田舎町といった風情である。他の村と唯一違うのは、濁った川と並行して石灰岩の岩山が垂直な壁を剥き出しにしながら、どこまでも続いているということだ。

ドルドーニュ川沿いにできた天然の岩棚は、もともと原初の住居として機能していた。氷河期にはマンモスが、そして暖かくなるにつれて馬や鹿、ライオンなどがあたりを徘徊し、やがて人間もこの地で生活を営むようになる。岩にえぐられた横穴は、最初に移り住んだ人類にとっては雨風をしのげる格好の住み処だったのでだろう。以来、数万年にわたってその空間は更新され続け、現在も形をかえて人々が暮らしている。

ぼくが訪ねたのは夏の盛りだったが、日本のように湿気もなく過ごしやすいかった。周辺には、数万年前に遡る洞窟壁画群が残され、人類の古くからの居住空間は「岩棚住居」として、人々の暮らしに溶け込んでいた。かの有名なラスコー洞窟の壁

画も、レゼジーから多少離れてはいるが、似たような風土のなかにあった。ただし、今は保存のために実際の洞窟に入ることはできない。ぼく自身、どうか許可を得て本物のラスコー洞窟に入ろうと画策したが、まったくとりつく島がなかった。他の洞窟も、入ることはできても撮影は許されていない。

ぼくのように現地まで行ってガッカリする人を懐柔するためか、人の手によって作られた「ラスコーⅡ」という、本物と寸分違わないレプリカ洞窟が近くに作られている。当然ぼくはここに入って見た。たしかにラスコーの構造や雰囲気はわかった。が、これはあのラスコーとはまったく似て非なるものであり、ややもすると遊園地のアトラクションとなら変わりが無いのではないかと考えてくる。

レプリカの「ラスコーⅡ」を出ると、午後の柔らかい光がぼくを包んだ。ドルドーニュ川の岸辺でいつまでも昼寝をしたくなるような優しい光だった。クロマニヨン人がこの地に腰を落ち着けたのも、当然の選択だったと思う。本物のラスコーは見られなかったが、ラスコーを生み出した人々が触れたそのままの大きさにぼくは触れている。太古へ遡る想像力の翼が一気に広がった。そのときぼくは、教科書に出てくる本物のラスコーの一端に確かに触れたのだと思う。

石川直樹
いしかわ・なおき

写真家。1977年東京都生まれ。2000年、Pole to Poleプロジェクトに参加し、翌01年に当時の世界最年少世界七大陸最高峰登頂達成。04年には熱気球で太平洋横断に挑戦し、そのルポルタージュ『最後の冒険家』(集英社)で開高健ノンフィクション賞を受賞。11年に『CORONA』(青土社)で土門拳賞を受賞。『NEW DIMENSION』(赤々舎)では、世界に点在する洞窟壁画を撮影。